

《抄 訳》

ドリス・レッシング 『弟, ハリー・テイラー』

(訳) 松村豊子*

解 題

家族の物語は古今東西の普遍的な文学的テーマの1つである。「父」「母」「夫」「妻」「兄」「弟」「姉」「妹」と題する物語は、家父長制家族や核家族といった諸々の伝統的な家族制度が急激なグローバル化の影響で解体しつつある今日において歴史的社会的意味づけを変えながらも、脈々と次世代へ語り継がれている。ここに訳出した「弟, ハリー・テイラー」(‘My Brother Harry Tayler’)はドリス・レッシング(1919～)がノーベル文学賞を受賞した2007年に出版された彼女の父母の伝記『アルフレッドとエミリー』(*Alfred and Emily*)に編まれたエッセイの1つである。わずか数ページの短いエッセイだが、姉弟の離反と和解というテーマは背景となる一連の戦争——第1次世界大戦、第2次世界大戦、そして、戦後の南アフリカにおける民族独立戦争——の導入により斬新で独創的なものになっている。この小作品を読むと、世界戦争の時代と一般的に呼ばれる20世紀において戦争に翻弄される家族の離別と和解の独創的な形が明らかになる。訳出に先立ち、植民地で生まれ育ったドリス・レッシングと彼女の4歳年下のハリー・テイラーとの姉弟関係、また、その姉弟関係が作品にどのように反映されているかについて概説したい。

レッシングと弟ハリーは家父長制家族における典型的な姉弟関係にある。この家族形態では家督と名前を継承する息子が過度に重宝される反面、娘は個人の資質の優劣とは関係なく軽視され、後継ぎとしては兄弟の後手にまわらなければならない。2人の両親の家族観はイギリスが大英帝国として隆盛を極めた19世紀ヴィクトリア朝の父権制家族の理念と切り離せない。¹彼女の両親は第1次世界大戦を体験し、その後の中近東、そして、南アフリカへ移民し、父は再びイギリスへ戻ることさえなかった。そのせいか、彼らの故郷への憧れは強かった。勿論、このような祖国愛は大英帝国の繁栄を支えた白人男性(中産階級)至上主義に基づく植民地蔑視と表裏一体だった。弟ハリーは故郷への郷愁を除けば両親が支持する主義主張に反対することなく、素直にイギリス海軍学校へ入学し、その後はイギリス海軍へ入隊した。一方、レッシングは激しく両親、特に母親に反抗し、植民地生活を疎んじ、帰郷を夢見る両親を反面教師として、成長した。彼女は既成の家父長制家族形態を否定し、植民地生活に積極的に馴染み、現地人であるアフリカ人とも違和感なく交流した。従って、レッシングは当然のことながら、両親や弟とは政治的見解を異にし、南アフリカの独立を終始一貫して支持し、戦中戦後の混乱の時期には Kommunismus やフェミニズムに深く傾倒したほどである。このような人種・階級・男女という諸々の差別意識からの解放を強く希求するレッシングは『母とわたし、生意気な娘たち』ほかの自伝的な作品において家族、特に母親との根深い確執と

* 江戸川大学 情報文化学科教授

社会的疎外感を繰り返し表明している。父母についてはすでに別稿で論じたとおりである。² 弟との関係で興味深いことはレッシングの父母に対する態度と弟に対するそれとが著しく異なることである。つまり、父母の場合は対立拮抗が、そして、弟の場合は和解が意図的に強調されているのである。

「弟、ハリー・テイラー」は第2次世界大戦中の出来事の描写に始まり、戦争が及ぼした影響の意味の読み直しと懐古感で終わる。この姉弟物語の基調音は繰り返すまでもなく一貫して和解である。この小作品だけを読むと、姉弟が幼いころから親密な仲であり、反目や絶縁はなかったかのような錯覚に陥る読者もいるだろう。しかしながら、レッシングの1950年代から80年代にかけての初期及び中期の作品を読むと、21世紀初頭に執筆された本作品とは異なり、姉弟の反目離反から和解への道が決して平坦でなかったことが明らかになる。

レッシングの最初の自伝的な小説である『マーサ・クウェスト』(Martha Quest 1952)には、愚鈍な弟が社会的に優遇されるのを不満とするヒロインが登場する。舞台はレッシングの故郷であるジンバブエの片田舎の町。ヒロインは17歳の思春期を迎えたばかりの才気煥発なマーサ・クウェスト。そこではオランダ人、ギリシャ人等々のヨーロッパから移民した白人たちが偏狭で排他的な小社会を形成している。大英帝国の繁栄と栄光を妄信する両親は読書好きで活動的なマーサが1日も早く本国イギリスの大学入学資格試験に合格し、暗黒のアフリカを脱することを切望している。ところが、両親の期待が大きすぎたせいか、マーサは過度のストレスから心身の健康を害し、受験さえできない状態に陥っている。親の教育方針や価値観に賛同できないマーサとは対照的に、弟ジョナサンは両親の夢を容易に実現する。以下は寄宿生として名門校に通う弟ジョナサンに対するマーサの不平不満である。

なぜ名門校で学び、有利な条件を享受するのが彼女でなく、脳みそが彼女の半分しかない弟

なのかしら。(中略) 弟は父そっくりの外見をした単純明快な青年で、休暇毎に帰省し、近所の農場を訪れ、馬で駅前まで乗り付け、ギリシャ人のソクラテスや原住民相手に店を営むコーエンを訪れた。彼は誰とでも上手くやっていた。弟は南アフリカの移民白人を軽蔑していた(これは典型的なイギリス人の姿だった)にもかかわらず、ヴァン・レンズバルグ家で息子同然に待遇され、コーエン兄弟を当たり前のように訪れ、彼らと無駄話をしている。マーサはひどく不公平だと思った。(中略) 彼は両親が言ったことや学校で聞いたことを単純に繰り返しているだけだったのに。(Martha Quest 35-36)

『マーサ・クウェスト』では「弟」はこのように親や学校の教えに素直に従うだけの愚鈍な、女性である「姉」とは全く異なる共感できない人物として描かれている。マーサは父権制家族社会における跡取り息子の社会的権威と意味を全く理解できず、ジョナサンを徹頭徹尾邪魔者扱いしている。家長制社会ではマーサの能力や努力のいかんにかかわらず、ジョナサンが常に男性であるが故に優位に立つのである。作者レッシングはこの理不尽な不平等に着目し、マーサの自己形成をジョナサンのそれとは異質なものと語っている。極言すれば、ここでは姉弟は互いに相手の内面を理解できないし、理解するつもりもない他者として描かれているのである。ジョナサンがマーサの人格形成に影響する痕跡はなく、また、マーサがジョナサンに言及するのは上記引用箇所のみである。『マーサ・クウェスト』よりも22年後に発表された『生存者の回想』(The Memoirs of a Survivor 1974)では「弟」は登場さえしない。『生存者の回想』では語り手の自己意識の広がりかテーマである。語り手の女性はひたすら自身の意識下に眠る「母」や「祖母」や「娘」を探し出し、自己意識を活性化する。家族の絆の形成に「弟」が関与することはここでもない。³ さらに、レッシングを一躍世界的に有名な作家にした『黄金のノート』(The Golden Notebook 1962)でも「弟」は全く登場しない。レッシングと弟ハリーの関係

は、結局のところ、ヒロインの自己形成を主題にする作品にはほとんど反映されないのである。このことはフィクションに限らずエッセイにも当てはまる。『母とわたし、生意気な娘たち』等々の自己形成を主題とする場合には「弟」は概して父親の影のような実在感に乏しい存在となる。彼は頭脳明晰で才気煥発な「姉」とは対照的に存在感の薄い、勉強嫌いで愚鈍な家族の一員としてしか描かれない。

では、姉弟の強い絆はどのような形で表現されるのか。レスリングが自己形成でなく故郷アフリカへの郷愁を語る時、弟は無視できない大きな存在となる。『アフリカの笑い』(African Laughter 1992)では姉弟関係の亀裂の深さと和解への困難な過程が淡々と語られている。レスリングは1949年に30歳でアフリカを出て、ロンドンに移り住んだ。その後、共産党員のレッテルを貼られた彼女は政治的危険人物として故郷ジンバブエへの入国を法律で禁止される。入国禁止はその後30年近く続き、彼女は故郷へ戻る事ができなかった。しかし、ローデシアが内戦を経た後、ジンバブエとして新たに独立国家となった1982年に、彼女は入国が許された。この頃には彼女も共産党の社会改革に失望し、離党していた。1982年以降、88年、90年、そして、92年に各年に1度ずつ帰郷し、1992年には故郷再訪を旅行記として表した。それが『アフリカの笑い』である。姉弟は1956年に会って以来30年近い間、たまに手紙のやり取りをするくらいの間柄だったが、1982年の再会と和解の様子は、リアリズム小説を読みなれた読者の意表をつき、感傷的な描写は一切なく次のように寓話のように語られる。

わたしたちの家族は普通ではなかったの、弟と再会することは容易でなかった。とは言っても、普通って何だろう？大英帝国が存続している間(帝国の常ではあるが、大英帝国の寿命も短かった)、家族が世界中に離れ離れになることはよくあることだった。息子、あるいは、兄弟は海外のどこかの陸軍に所属したり、親類の女性は海外で伝道師として働いていたり(母

の親友の姉は日本にいた)、あるいは、(叔父のように)マレーシアでゴムを栽培をしていた。わたしがアフリカの草原で成長していた間、父母が哀れにも故国からはるか遠い国に追放されていた間、養祖母、叔父、叔母、従姉妹といった我が家の家族は相変わらずイングランドにいた。わたしがロンドンで暮らすようになってからも家族は南アフリカの各地に散らばっていた。

わたしと弟は仲良しだったとも言えるし、犬猿の仲だったとも言える。わたしたちはあらゆる点において異なり、長年の間、全然会わなかったが、久方ぶりに顔を合わすと、不思議なことに、お互いを初めて理解できるようになっていた。物の本によると、人間は遺伝子を基礎共有しているというから、わたしたち姉弟の相互理解はこのような遺伝子に起因しているのであろう。同じことが恋に落ちる時にも言えそうだ。はっきりした理由もなく共感もなく恋に落ちるのは、実のところ、別の人間の中に生き生きと体現される自身の劣性遺伝子を希求するという深層心理が働くためである。もっとも、このような言説を究極の自己愛だとして耳を傾けない読者もいるだろう。(African Laughter 30)

レスリングがここで「遺伝子」と呼ぶ姉弟の共有基盤とは、勿論、生物学的な意味もあるが、2人が幼い頃に過ごしたジンバブエでの家族の思い出である。

レスリングは『アフリカの笑い』においてジンバブエ再訪が感傷的な子ども時代の回顧ではなく、旺盛な想像力の源でもあることを告白している。彼女は作家の資質に深く関わる原風景としての故郷ジンバブエを次のように語っている。

作家には誰でも神話の国がある。それは必ずしも幼年時代である必要はない。わたしにも神話の国があり、それにけちをつけるような真似は声に出さずとも断固して赦すことはできない。『否』。わたしが育った草原、泥と草でできた懐かしい我が家、丘をゆったりと取り囲む農

耕地,そして,動物や鳥たち。神話は嘘くさい何かでなく真実を集約したものである。(African Laughter 35)

レッシングはこのように故郷を他者のいかなる干渉をも許さない原風景として神聖視している。ここで興味深いのは、この「神話の国」が弟ハリーとの関係修復において重要な役割を果たしていることである。神話の世界では個人の思想や資質や嗜好の違いから当然起こる離反・反目は消え、逆に、姉弟が共に異なる形で経験する戦争(第2次世界大戦とその後の南アフリカにおける民族独立戦争)によって被る心身の深刻な傷でさえ記憶の相違が醸し出す寛容な笑いによって自然治癒されるのである。このことが最も明らかになるのは、2人が若い頃の対立を四半世紀の時間を経た1982年の再会では記憶の相違として受け入れる点においてであろう。

『アフリカの笑い』にはレッシング姉弟の記憶の相違が繰り返し描かれている。しかも、2人の和解を妨げるような苦痛や怒りは微塵も示唆されず、記憶違いは常に双方の「笑い」で終わる。結局のところ、レッシングは意図的に記憶違いを姉弟の和解への重要な布石としているのである。具体的な例を1つ挙げよう。以下の引用文はかつて家族で赴いたキャンプ場で起こった出来事についての姉弟の会話である。

『クードー・ヒルの岩間で寝たことや、鼻先三寸のところにいる野生のブタを見たこととか覚えていないの?それじゃ、夕暮れ時に、トゥエンティ・エイカーの淵を覆い隠すように長く茂った草の間に隠れてカツオドリがやって来るのを見たことは?大草原でなにが起こっているのかを見ようとして木に登り、木の葉の陰に潜んでいたことは?』

『申し訳ないが、全然覚えてないや。』

『子ブタを連れた野生のブタに追いかけて、木の登ったこととか、樹皮や木の葉をブタに投げつけて追い払ったことも覚えていないの?あのブタはわたしたちを追いかけて来て、

木に登ろうとさえしたのに・・・木の幹に前足をかけて後ろ足で立ち、ブーブー鳴いていたのに?それで、わたしたちは笑いすぎて、危うく木から落ちそうになったのに?』

長い沈黙。

『ぼくはそういうことをすべて記憶から締め出したようだ。』

『そのようね。』

『しかし、ねえ、すべてのことを記憶から締め出したのには理由があったはずだよ。』

『そうだと思うわ。』

『姉さんはいろんなことを忘れずに、しっかりと覚えているね。』

『多分、わたしとは生き残る方法が違ったのよ。』(African Laughter 62)

同じ光景を同じ時間に同じ場所で目にしていたにもかかわらず、レッシング姉弟の記憶に残る光景はこのように全く異なる。細かいことまではっきりと記憶している姉と、すべてを記憶から消し去っている弟。記憶していることの差異から推すと、姉弟がかつて見解の相違から大喧嘩したり、会話もないほど疎遠だったことは容易に想像できる。レッシングは姉弟の間で記憶がこのように大きく異なる理由を戦時の辛い経験を生き延びるための本能に帰し、個々の意識の中に厚い壁が生じ、記憶を部分的に、あるいは、全面的に封印する点に着目している。

弟との会話はこんな風に終わることが多かった。ぼく、ぼくたち、彼女、彼、彼ら、君、君たちは今、代償を払っているんだよ。罪を犯せば罰が下るのは当然だろう。このように目に見えない壁がいつも弟を取り巻き、「全面禁止」…「否」…「立ち入り禁止」等々の道標が彼の心の中にあった。「当局による禁止!」勿論、これはわたしの場合にも当てはまるのである。わたしと弟では壁も禁じられた場所も違っていただけの話である。(African Laughter 41)

ここで言及される諸々の「禁止」に関する道標

は、当局による入国禁止を含めた物理的な禁止を表すというよりむしろ、生き残るために無意識に辛い体験を封印する心の働きと深く関係していると思われる。『アフリカの笑い』よりも10年ほど前に執筆された『生存者の回想』では、レスリングは「壁」を主要なモチーフとして導入し、語り手の深層心理を「意識の流れ」の手法に則り明らかにしている。⁴レスリングと弟ハリーが第2次世界大戦、また、それに続く民族独立戦争をそれぞれ異なる方法で経験したこと（姉は民族独立を筆1本によって、弟は帝国支配を武器によって支援した）を考えれば、2人が共に戦争を生き延び、生き続けるために心の中に「壁」を築き、耐えられないほど悲惨な現実を心の深層へ封印したとしても不思議ではない。2人が過去を顧み、語り合う時、封印された過去が「壁」の向こう側に蘇り、「壁」は束の間消滅したのであろう。徒然なる思い出話は過去と現在をつなげ、心の傷を癒し、和解を可能にしたとも言えるのである。

余談になるが、ここで「意識の流れ」の手法を小説の画期的な技法として積極的に導入したことと有名なヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf 1882-1941) のレスリング文学への影響について簡単に述べたい。ウルフはレスリングの父親と同世代のイギリスの女性作家であり、レスリングが尊敬する作家の1人である。ウルフは肉体を否定し精神の優位性を称揚した19世紀ヴィクトリア朝の道徳観に強く反対し、事実の集積に裏打ちされたリアリズムでは豊かな人間性を表現できないと判断し、個人の「意識の流れ」に着目した20世紀初頭の前衛作家の1人である。平凡な女性の1日の心模様を丹念に綴った『ダロウェイ夫人』(Mrs Dalloway 1927) は彼女の代表作の1つである。この作品は近年マイケル・カニングガム (Michael Cunningham 1952-) 作『めぐりあう時間たち』(The Hours 1998) において「ダロウェイ夫人」と作家ヴァージニア・ウルフが共に3人のヒロインのうちの2人として描かれ、しかも、1999年にこの作品がピューリッツァ賞を受賞したことから、日本でも有名になった。では、骨太な物語構成を好むレスリングは、詩的で繊細な文

章（すなわち、物語と呼ぶに値する筋立てがない作品）を好むウルフのどのような点に魅了されたのだろうか。

まず、ウルフ作品の特質を明らかにするためにウルフの『ダロウェイ夫人』と、ヴィクトリア朝の代表的な女性作家ジョージ・エリオット (George Eliot 1819-80) の自伝的な小説『フロス河畔の水車場』(The Mill on the Floss 1860) とを比較してみよう。いずれの小説もヒロインの自己形成を主題にしているにもかかわらず、前者では後者に見られる灰汁のある人間関係が全く描かれず、日常生活の些細な出来事が個人の意識にどのように映るのが木目細やかに美しく描かれている。ウルフは諸々の欲望を抑圧する厳しい道徳観に裏付けされた人間関係を作品の題材にすることを機会ある度に否定しているが、「病むことについて」(“On Being Ill” 1926) というエッセイでは既成の道徳律を全面的に否定し、肉体が精神に及ぼす多大な影響を声高に論じている。「愛は華氏104度の気温に、嫉妬は坐骨神経痛の激痛に玉座を譲り、」「不眠は悪役を演じ、クロラルとも呼ばれる鎮静剤こそが主人公にならなければならないのです」と、ウルフは大胆な小説論を説く (Woolf 102-3)。⁵ウルフが実際に華氏104度の世界や精神を病んだ世界を作品に描いたことはないが、このマニフェストは彼女の透明感溢れる作品からは想像もできないほど過激な発言である。彼女の作家像は一般的には近年日本でも公開された映画『めぐりあう時間たち』(The Hours) でニコール・キッドマン (Nicole Kidman 1967-) が演じたような神経質で仕事熱心な女性であろう。実際、精神を病んでいたウルフは若い頃から精神安定剤が手放せなかったようだ。ところが、レスリングは華氏104度の地域、つまり、南アフリカでは愛 (ヴィクトリア朝小説で称揚される道徳的愛、特に家族のために自己犠牲を厭わない「家庭の天使」の献身的な愛) が不毛のテーマであることを身をもって体験していたためか、ウルフの繊細な作品世界の背後に「粗野で露骨な喧嘩早い」生身の奔放な女性が控えていることを鋭く感じ取っている。「後世の読者はウルフ像を荒々

しく粗忽で反抗的な気質が創造の源であることが分からないほど見事に洗練された女性に読み替える必要があったのだろう。(中略)この女性は病んでいない時には人生を謳歌し、パーティを好み、友人たちと自由に交流し、ピクニックや遠出や遊山旅行に興じていたのである」(‘Carlyle’s House’ 23)と、レッシングはウルフの実像について興味深い指摘をしている。実際、ウルフの日記を読むと、レッシングが指摘するように、ウルフは体調が良いときには友人知人と夜更けまで語り、旅行を楽しみ、ロンドンの雑多な景観を堪能していることが分かる。⁶父親の身体的な病が彼の精神に及ぼした多大な悪影響を間近で見て育ったレッシングは、ウルフの過激な文学批評だけでなく不安定な実生活をも理解し易かったのであろう。傷つきやすく病身だったにもかかわらず、伝統や因習を打破しようとした挑戦的な先輩作家はレッシングに自身の病んだ父親を彷彿させたにちがいない。⁷

論の道筋をレッシングと弟ハリーの姉弟関係に戻すと、2人の反目と和解の物語は事実の単純な集積を退ける点においてウルフの「意識の流れ」の物語と同質である。しかしながら、それと同時に、レッシングは最終的に家族の和解を希求する点においてウルフとは袂を分かつのである。ウルフは作品において家族の絆を断ち切り、個人の精神の解放をあくまで追求している。レッシングがウルフの作品とは異なる性質の物語を構築する要因の1つは、レッシングの家族史が戦争と深く関わっていることに求められるであろう。ウルフの父親も兄弟も夫も従軍経験は皆無である。また、ウルフには戦禍に巻き込まれるかもしれない子どももいなかった。他方、レッシングの父親も弟も夫も、そして、息子も其々第1次世界大戦、第2次世界大戦、ジンバブエの内戦に従軍している。ちなみに、ここで言及する息子は最初の結婚で生まれ、離婚により、夫の元へ残した長男ジョンである。レッシングは『アフリカの笑い』が出版された直後のインタビューにおいて次のように家族と戦争の関わりについて語っている。

我が家の家族史は戦争を抜きにしては語れません。実に恐ろしいことです。実際、わたしたちは恐怖の坩堝にいました。戦争は昔も今も変わらないのです。戦争は今こうして話している間も世界中で起こっています。ユーゴスラビアを見て御覧なさい。何が起きているのでしょうか。わたしの両親のように戦争で深く傷ついた人がおそらく何百万といるでしょう。戦争は無くなることはないのです。(Mizoguchi 254)

レッシングはここでユーゴスラビアの内戦に言及しているが、同じインタビューで南アフリカの内戦(ゲリラ戦)の筆舌に尽くしがたい恐怖をも語っている。

南アフリカは恐ろしいところです。景色の美しさとは別に、そこはこれまで、そして、今も恐ろしいところです。どれほど恐ろしいかは誰にも分からないでしょう。あの地は黒人のものです。そう、アパルトヘイトはすでに終わったと言うのは簡単ですが、アパルトヘイトの下で育った人々が新しい体制に慣れるのは非常に難しいのです。1晩でできることではありませんから。(Mizoguchi 162)

戦争で恐ろしいことは日常生活において戦争以外のことが感じられないことです。なかには戦争を楽しみと思う人もいます。このうえなく楽しむ人もいます。わたしは右翼白人集団のタブランチェに入るような人と一緒に育ちましたが、彼らは戦闘が好きでした。彼らは戦争のために教育され、戦争を愛し、人殺しが好きでした。こういった人はどこの国にもいます。数は少ないのですが、とても強力なのです。(Mizoguchi 165)

レッシングが戦争の恐怖を語った言説を挙げれば枚挙にいとまがないほど多い。弟ハリーや息子ジョンは明らかにここで彼女が言及する「右翼」の好戦的な男性集団に含まれるのである。彼らの記憶の「壁」は生き残るために厚く堅牢にならざ

るをえなかったと容易に想像できる。

1982年のアフリカ再訪以来、レスリングは度々アフリカへ帰郷しているが、それは家族それぞれの記憶の「壁」を束の間消滅させ、彼らが共通基盤である「遺伝子」を見つけ、家族の絆を再構築するためには欠かせないことだったのである。事実、レスリングは故郷再訪を機に弟だけでなく、幼いときに生き別れになった息子とも和解への道を探したようである。『アフリカの笑い』が出版された数年後に出版された自叙伝にはハリーとジョンの外見、及び、戦後の過ごし方の類似性に息子ジョンとの和解の糸口を見出したことが記されている。ハリーが戦後をアフリカの草原で過ごしたように、ジョンはジンバブエ独立戦争後、18歳で単身カナダの北極に近い辺境の地へ移民する。カナダで数年過ごしたジョンと会ったレスリングはその時の感慨を次のように語っている。

息子のジョンが部屋に入って来たとき、思わず『こんにちは、ハリー』と言いそうになった。2人の歩き方、立ち姿、肩の怒らせ方、笑い方がそっくりだった。(中略) ジョンはわたしが魔女ヘカテの化身、アフリカ人支持者、共産党員だと信じるように育てられた。わたしについて良いことは何も聞かされず、わたしに手紙を書くことさえ禁止されていた。わたしが子どもたちへ送った手紙や本も、子どもたちがわたしへ送った手紙も当局によって没収された。ジョンにとって、問題児である母親とどのように接するかは難しい問題だったにちがいない。でも、結果から言うと、万事が上手くいったのである。(Walking in the Shade 224-25)

ハリーとジョンはレスリング自身とは異なり、共に好戦的な人種差別主義者であり、戦争の後遺症から回復する方法も同質で、2人ともに自然へ回帰する。ハリーとの和解で「神話の国」が鍵となったように、母子関係がほとんどなかったジョンとの関係修復もやはり「神話の国」がなければ不可能だったと懸念される。レスリングは確かに息子ジョンの背後に弟ハリーの姿を見ていたので

ある。

ここに訳出した「弟、ハリー・テイラー」では父母の思い出話にみられる家族間の確執がないのに比例して戦争の破壊力が強調されている。レスリングは戦争による破壊と再生を疎遠だった姉弟の和解の物語に直接的に反映させ、日常生活の1コマとして淡々と描いている。戦争と家族を主題にした文学作品は数多いが、レスリング文学の独自性は戦争により破綻した家族関係が「記憶」の読み直しという形で修復し、世代交代さえ正常化する点である。本作品は小作品ではあるが、レスリングの筆が冴えた優れたエッセイであることに違いはない。ここで面白可笑しく語られる出来事の多くは、当時は非常に辛く、苦痛に満ちたものであったに違いないが、レスリングはジンバブエ再訪を機に「神話の国」では「記憶が喜劇の源泉になる」(Under My Skin 328) ことを知り、姉弟愛をユーモラスに描くことが可能になったと言っても過言ではないのである。

『弟、ハリー・テイラー』

第2次世界大戦の初め頃、イギリス戦艦2隻が敵艦を追って太平洋上にいた。リパルス号とプリンス・オブ・ウェールズ号。両艦ともタイタニック号と同じように不沈戦艦として名声を博していた。これらの戦艦の製造に関わった民間人と多数の納税者ならば、この大型船の機能を見誤った「専門家たち」がその後どのような運命を辿ったのかに当然思いを馳せるだろう。彼らは昇進し、準男爵や公爵になったのか。あるいは、航路の可能性を裁決する他の部署へ移動になったのか。

わたしの弟はその時リパルス号の甲板にいた。日本軍はたった20分で両戦艦を沈没させた。沈没の知らせに、私たちは愕然とした。何百何千という兵士が大海で溺れた…それにもかかわらず、正確な情報が届くまでかなり長い間待たなければならなかった。一体全体、どこからどのように情報は伝わったのだろうか。従軍記者は未だ太平洋に到着していなかった。生き残った人々が自らの体験を語るようになって初めてすべてが徐々に明

らかになったのだ。弟は世にも稀な筆不精の1人だったにもかかわらず、わたしたちに手紙を書いた。もっとも、手紙はすぐにはわたしたちの手元へ届かなかったが。

「全然楽しくなかった」と、弟は後日白状した。爆撃があったあの恐ろしい朝、彼が甲板へ続く昇降階段のそばに立っていると、皆が彼のそばを走り過ぎた。「テイラー、君は甲板へ上がらないのか」と、誰かに声をかけられた。弟が人の流れに押されて、梯子を登ると、戦艦はすでに沈みかけていた。弟は斜めに傾いた甲板を滑り降り、海へ入ると、生き残った他の兵士たちと一緒に戦艦から慌てて離れた。彼らがかなり離れたところまで泳ぐ着く頃、リパルス号は完全に沈没した。彼らは死体と油と諸々の残骸に囲まれて、数時間漂流した。しかし、付近にいたはずの鯨は、おそらく油を嫌ったのであろうか、彼らに近寄らなかった。まもなく、イギリス船が彼らを海から拾い上げ、セイロンへ搬送した。彼らはそこで初めて報道記者に自らの体験を語り、その後怪我治療のため病院へ移された。怪我が治ると、ハリーは今度はオーロラ号に配属され、戦争が終わるまで地中海海上で戦闘に関わった。弟の聴覚障害は10代の頃から始まっていたが、戦時の銃撃戦のせいでもかなり悪化してしまった。

ハリーとわたしは次のような事情でケープタウンで出会った。

わたしが産んだ最初の子どものジョン・ウィンダムは邪魔や怒りに対して静かに黙って遣り過す子どもではなかった。彼の妹、つまり、わたしの2番目の子どもが生まれると、ジョンはびっくり仰天した。新しい生命、赤ん坊がずっと彼のそばにいるのだと知ると、彼は裏切られた怒りからか、これまで聞いたことがないほど激しく泣き喚いた。そして、赤ん坊だけでなくわたしをもすでに攻撃力をつけていた小さな拳でたたかに叩いたのである。「ぼくにどうしてこんなことをするんだよ?」彼が伝えたかったのは多分こういうことだったのだろう。

度重なる家族会議に、わたしは疲れ果てていた。「祖母は8年間に8人の子どもを産んだが、しか

しながら、それで体調を崩すというようなことは1日としてなかったなあ」というようなことを度々耳にするが、わたしに言わせると、早すぎる妊娠は間違いなく女性を心身ともに磨滅させる。隣に住んでいた女性は望んでいたにもかかわらず、女の子を授からなかった。その女性が娘の世話を喜んで申し出てくれたので、わたしは娘を彼女に預け、早速ジョンを連れて海岸地方へ向かった。そして、そこで昼夜を問わず、ジョンと2人っきりで過ごすとは、彼は見事に回復したのである。

小型の御者台ほどしかない小さなクーペに乗り、ケープタウンまで旅行したこの旅について以前エッセイを書いたことがある。人生の老兵はしばしばどの経験が一番辛かったかを考えながら、過去を顧みるものである。わたしの場合、好ましくない経験の一覧表のトップにくるのは、狭い空間に5日間も血気盛んな元気な男の子と一緒に閉じ込められたことである。でも、まあ、とにかく遂に海が見え、ホテルに無事に着いた。ホテルはシーポイントの海岸通りにあった。近辺のホテルはすべて行楽向けだった。正面玄関は数珠繋がりになった色とりどりの豆電球の鎖で飾られていた。わたしたちが宿泊したホテルは超満員だった。シンガポール陥落を生き延びた人々が海を渡り到着したばかりだったのだ。容易に想像できることだが、そこには戦争で足止めされたありとあらゆる種類の旅人が滞在しており、そのうちの大半は平時に慣れ親しんだ宿泊施設よりはるかに劣悪なところへ強制収容された。戦時体制のもとで家屋を軍に徴収されたビジネスマンもいれば、官僚もいたし、普通の事務員もいた。

そこにクウェーカー教徒もいた。わたしは彼らの数人と当時猛烈に必要としていた大人の会話を交わすことができた。わたし自身は南ローデシアにおける白人による支配体制を好意的に語るはずもないが、しかし、かといって、他の誰かが偏見にとらわれることなくこの点について語るのも聞いたことがない。覚えておかなければならないことは、わたしの両親が植民地へやって来た1924年にはこの地が南アフリカの6番目の州になるかどうかについて国民投票、あるいは、これに類し

た何らかの投票があったということである。その当時はローデシアのすべての住民が投票した。「われわれはイギリス自治領の1つである。」

仕事の関係でケープタウンへ来ていた6人のクウェーカー教徒は、わたしが「あの頑固な小国」の出身だと聞くと、さっそく議論を吹きかけてきた。しかし、形勢はわたしに圧倒的に有利だった。

「まったくもう…馬鹿馬鹿しい話だよ。君たちはわが道を歩んでいるというが、事実はそのではないのだ。わずか10万の白人が50万〔当時の正確な数字〕の黒人土着民を支配している現状では、我々——南アフリカ在住の白人——が法律を可決するたびに、君たちは我々の真似をして同じ法律を制定し、我々の土地所有に関する法律を1つ残らず導入する。そんなことなら、いっそ南アフリカの属州になってもいいのではないか？ これもイギリス、あれもイギリスと言われると、胸糞が悪くなる……」このような議論を延々と繰り返しているうちに、わたしの気分は持ち直した。

ジョンは超満員の騒がしいホテルが気に入った。何よりも生まれたばかりの妹が傍らにいなかったから、彼は非常に楽しく過ごしていた。ある日、海軍将校候補生だったハリー・テイラーがわたしたちのホテルのベランダに姿を現した。彼は驚くほどの美男子だったから、近くにいた女性はこぞって彼を一目見たがった。彼女たちは窓越しに彼をじっと見つめたり、ベランダに出てお茶をするふりさえした。

わたしはこの時初めてリパルス号に何が起こったかを知った。

「分かっているだろうけど、ちょっと吃驚したよ。ずいぶん後になってから、ようやく何が起こったかを知ったんだ。何週間も呆然自失の状態だった。セイロンは記憶の中では今もぼんやりとしており、霧の中だよ。」

「それで、救助船が来るまでどれくらい海にいたの？」

「分からないよ。みんなは数時間だったと言うが、ぼくは数日だったと思う。海水はなま暖かかった——でも、それは気にならなかった。あたり一面に死体が浮いていたから。そのうち数体は知人

のものだった。ヒリヒリと焼けるような太陽のもとで火傷しそうだった。実際、火ぶくれだらけになったよ。頭が乾かないように注意していただけだ。他の者は浮いているものに捉まり、助けを求めている。『タイムズ』に掲載された生存者の1人の記事を読んだが、それによると、鮫もいたようだ。ぼくは1匹も見なかったけど。誇り高い鮫は油が浮いた海で一体何を探していたのだろうか。妙な話だけれど、油は日焼け防止には結構役立つと思うよ。」

「甲板へ上がるように命じた兵士についてはどう思うの？」

「そうだな、姉さん流に言うと、幸運だった。ぼくはすぐさま甲板へ上がり、戦艦が完全に沈没する前に遠くへ泳いで逃げることができたからねえ。そうでなければ、戦艦と運命をともにしたにちがいない。でも、ティグ〔幼い頃のわたしの呼び名〕には本当のところは理解できないよ。こんな途方もないことはね。」

「それじゃ、君にはわかるの？」

「ああ、できれば分かりたくないけど。楽しくて仕方がないような経験じゃないから、最初から最後までね。」

弟との会話——後日談——は今になるとこんな風にしたと想像しているが、でも、もう何十年も昔のことだ。後日、地中海海戦にも関わったハリーはロンドンで難聴の治療を受けが、完治することはなかった。性能がよい補聴器は彼がかなりな老齢になるまで発明されず、それを着用されることはなかった。弟は結婚し、子どもたちを育て、灌木や草原や動植物に関する驚くべき知識を駆使して仕事に励んだ。その戦争後、黒人が草原のゲリラ戦で勝利をおさめ、黒人政府が樹立すると、ハリーは黒人政府のもとでは暮らせないといい放ち、南アフリカへ移った。しかし、そこでも黒人政府が誕生すると、弟は若かったにもかかわらず、心臓発作で亡くなった。この間、わたしたちは数回、ロンドンのわたしのアパートで会い、台所で会話を交わした。民族独立戦争について言えば、ハリーは白人を支持し、わたしは黒人を支持していたので、わたしたちは決して打ち解けることが

できなかった。だから、2人共に年老いていたにもかかわらず、わたしたちは会っても沈黙することが多かった。互いに相手に言いたいことが山ほどあったにもかかわらず。弟とわたしには共通点がほとんど無かったので、話題を見つけるのさえ難しかった。弟が黒人蔑視の決まり文句を面々と並べ始めると、わたしは当然のこのように口をしっかりと閉じて沈黙しなければならなかった一方、彼はこの件に関するわたしの見解が極めて不愉快であることを匂わし寛容を装ったものだ。

しかしながら亡くなる少し前、ハリーはわたしに何か言いたいことがあると言ってやって来た。わたしに何かを分かって欲しかったのだろう。彼の妻はすでにその頃心臓発作で亡くなっていたから、孤独だったのだろうか。とにかく、彼は昔ながらの太古からの人間の欲求、すなわち、手遅れになる前に何かを釈明する必要性を強く感じていたのである。言わなければならないことが誰か他の人の心に伝わらない限り、現実から消失するような気になっていたのだ。誰でもかまわないから誰かに何かを伝えたかったのだ。

彼は黒人解放戦争参戦には歳をとりすぎているため、兵士としては従軍しなかった。ところが、弟のように実戦には歳をとりすぎた農場経営者たちは、夜になると、トラックや装甲車に乗り込み、近在農場の白人と無線で連絡をとったり、彼らの安否を確かめるために農場へ立ち寄りしたりした。自由解放軍が待ち伏せしたり、地面には地雷が埋められていたりしたため、街道は危険だったが、陸軍の兵士ほど危険ではなかった。ハリーはほかの大多数の人たちと同じように戦況を楽しんでいた。

平和主義者や戦争縮小を唱える人々は戦争好きな人々がいることを頑として否定するが、それは大間違いである。

かつて極めて好戦的な少年だった息子のジョンもまた戦争好きだった。息子は危険な状況下において完全武装して灌木の間を這いずり回ることに無上の喜びを見出ししていた。

これまで3度ほど男たちが戦友相手に過去の幸せな時代について談笑するのを聞いたことがあ

る。話の内容はいつも基本的に同じだった。

父の話はその1例である。父はドイツ人の炭鉱労働者（偶然見つかるほんのわずかな金鉱のために塹壕やら立坑やらを掘っていた）のもとへ通っていた。2人はそれぞれイギリスとドイツの元軍人だったが、同じ時期に同じ地域の最前線で戦っていた。彼らは何時間も続けて巡回中のあれやこれやの出来事とか、危機一髪の危険な状況——2人は実際に負傷していた——について語り、将校たちが有能だったかどうかについて議論していた。

深い轍とでこぼこだらけの道路。夜間に古いトラックに乗って激しく揺れながら出撃することほど危険なことはなかった。ある夜、ハリーが乗ったトラックは轍にはまるか、あるいは、丸石とぶつかった。トラックの後部荷台は大勢の兵士たちですし詰め状態だった。全身に激しい揺れを感じた瞬間、弟は運転座席の後部仕切りに頭を強打した。

「あれは本当に凄い衝突だった。すぐに気分が悪くなった。医者を通じて呼び——ガソリンが配給制だったので、自家用車を勝手に使えなかったから——容態を医者に話すと、『脳震盪ではありませんね。脳震盪のようにみえません』と、医者に診断された。でも、脳震盪みたいだった。…どうのように言えばよいのか分からないが。マラリア事件のことを覚えているかい？」

「覚えていないわ。」

「ほら、熱で震えが止まらないかと思えば、次の瞬間には意識が鮮明になり全世界を掌握したような気になっただろう。けれど、事実は違った。高熱等々の症状は全くなかったから、ぼくはマラリアではなかった。単に正気を失っていたに違いないと思う。あらゆることが眩く鮮明だった。変化の意味を理解するのに何日もかかった。でも、ある日突然分かったんだ。リパルス号の1件がこれとそっくり同じだった。トラックの後部仕切りに頭を強打して、ぼくは正気に戻れたんだと思う。突如、本来の自分が蘇り、ぼく自身に戻ったんだよ。それで、それまでの40年間、ぼくは本来のぼくではなかった

という事実にも否応なく直面することになった。鏡の裏側にいたようなものだ。説明するのが難しいのだが…」

「ハリー、無理しなくてもいいのよ。それからどうしたの？」

「ええっと、これはモニカ〔彼の妻〕が鋭敏な本来のぼくを知らなかったということだろう。そして、子供たちも——ティッグ、上手くやっけていくのは難しいよ。リパルス号の事件はぼくの意識の基軸を外した何かだったのだ…ええっと、その間ぼくがどんな様子だったか教えてくれないか。」

「わたしたちはかなり長い間会っていませんでしたしょう？」

「そうだなあ、会ってなかったよな。」

耳が遠いせいで鈍感だったというのがわたしの返答だった。弟もそれに同意したようだった。

「ずいぶん長い間、難聴気味だったと思う——補聴器も着用していませんでした。しかし、そのせいではなかった。難聴だったかもしれないが、視力はよかったし、五感もしっかりしていたから。それにもかかわらず、すべてのことが漠然としていた。頭がすっぱりと布で覆われていた。水中で遠くの音を聞いているような感じだった。ティッグ、ずっとそんな感じだったよ。もとのままここへは立ち寄らなかったがね。」

テキストには Doris Lessing “My Brother Harry Taylor” *Alfred and Emily* (London: Harper Perennial, 2008) を使用。引用末尾の()内の数字は掲載ページ数を表す。また、文中の邦訳はすべて筆者による。

注

¹ 拙稿「エミリを探して——ドリス・レスリング『生存者の回想』を中心に」『文学研究』（津田塾大学大学院文学研究科同人、2011年）37号 [182-99] を参照。

² 母親との確執については拙稿「『抄訳』母とわたし、生意気な娘たち」(1) *Language Education* (江戸川大学語学教育研究所、2009年)7号 [1-13] を参照。また、

父親との関係については拙稿「『抄訳』父の思い出」*Language Education* (江戸川大学語学教育研究所、2012年)10号 [13-21] を参照。

³ 『生存者の回想』はレスリングが自叙伝として執筆した最初の小説である。

⁴ 『生存者の回想』における「壁」のイメージの多様性については前掲「エミリを探して——ドリス・レスリング『生存者の回想』を中心に」を参照。

⁵ 「病むことについて」の日本語訳は川本静子編訳『病むことについて』（みすず書房 2002年）を参照。

⁶ ウルフの日記については Anne Oliver Bell が編集した *Selected Diaries* (London: Vintage, 2008) を参照。ウルフは病氣治療の一環として日記をつけていた。

⁷ レスリングの父親像については拙稿「父の思い出」*Language Education* (江戸川大学語学教育研究所、2010年)10号 [13-21] を参照。

引用参考文献

- Cunningham, Michael. *The Hours*. NY: Picador, 1998.
- Lessing, Doris. *African Laughter*. London: Flamingo, 1992.
- _____. *Alfred & Emily*. 2008; London: Harper Perennial, 2009.
- _____. “Carlyle’s House: Newly discovered pieces by Virginia Woolf” (2003) *Time Bites: views & reviews*. London: Harper Perennial, 2006.
- _____. *Martha Quest*. 1952; London: Harper Perennial, 2001.
- _____. *The Memoirs of a Survivor*. 1974; London: Harper Perennial, 2007.
- _____. *Under My Skin*. 1994; London: Flamingo, 1995..
- _____. *Walking in the Shadow*. 1997; London: Flamingo, 1998.
- Mizoguchi, Akiko. “Lessing and Africa – An Interview with Doris Lessing – Part I” 『英語青年』 July 1, 1995 (Vol. CXLI. No. 4.) 162- 67.
- _____. “Lessing and Africa – An Interview with Doris Lessing – Part II” 『英語青年』 August 1, 1995 (Vol. CXLI. No.5) 250-55.
- Woolf, Virginia. “On Being Ill” (1926) *Selected Essays*. Ed. Bradshaw, David. Oxford: Oxford UP. 2008.
- _____. *Selected Diaries*. Ed. Anne Oliver Bell. 1977; London: Vintage Books, 2008.
- 岡本徹監修 『めぐりあう時間たち:DHC 完全字幕シリーズ』 東京, DHC, 2003年.
- ヴァージニア・ウルフ 『病むことについて』 川本静子編訳, みすず書房, 2002年.

A Japanese Translation and Interpretation
of “My Brother Harry Tayler”
by Doris Lessing

MATSUMURA Toyoko

Abstract

“My Brother Harry Tayler” is an essay contained in Doris Lessing’s biography of her parents, *Alfred and Emily* (2007). Lessing has written a great deal about her parents, especially her dominating mother, ever since she began writing professionally in the latter half of the 1940s. Few readers can deny that the theme of an antagonistic mother-daughter relationship lies at the root of her fiction works, which are deeply concerned with the heroine and writer’s self-development. On the other hand, Lessing rarely mentions her younger brother, Harry, except when she refers to her old African home in Zimbabwe as the myth of the country. The reason that her brother seems absent from her bildungsroman is that Lessing’s parents so adhered to the Victorian ideals of manhood and womanhood that they raised their son and daughter according to sexually discriminatory ideals. Brother and sister apparently shared nothing physical, emotional, or intellectual. In fact, Lessing never wrote anything about her brother until after her return to Zimbabwe in 1982, which she had left there more than 30 years before that date. Her travel journal, *African Laughter* (1992), indicates that her frequent trips to Africa played a major role in her eventual warm-hearted reconciliation with her brother.

“My Brother Harry Tayler” may be regarded as a kind of sequel to *African Laughter*, but this marvelous short essay convinces us that the whole history of the Tayler family pivots on modern wars such as World War I, and II, and the Bush War. Harry not only went to World War II but also fought against the liberation of the Blacks during the Bush War. The reconciliation of brother and sister finally led to their mental and emotional recovery from the devastation of the wars.

Lessing’s various experiences, which are deeply rooted in the history of Zimbabwe, have made her an inimitable writer. A Japanese translation of “My Brother Harry Tayler” will serve to bring her legacy and her story to a wider audience.